

工芸のアーティスト・イン・レジデンス事業に関する考察 滋賀県と瀬戸市を事例にして

Writer

翠川 萌恵 MIDORIKAWA Moe

博士前期課程芸術専攻
芸術支援領域 2年

本研究は、芸術に関わる作家を支援するアーティスト・イン・レジデンス(以下本文「AIR」と表記する)事業の中で、工芸作家を支援するものに着目しAIR事業が行われている周囲の地域との関わりや滞在作家の地域との交流などの活動内容を明らかにする。工芸のAIR事業を行なっている文化施設、文化財団の活動を事例として上げ、運営をする職員、滞在する作家等からの視点を交え、現在の工芸のAIR事業の役割を考察する。

工芸のアーティスト・イン・レジデンス

まずAIRとは一定期間、作家をある地域に招聘し、その中で創作活動を支援する事業である。現在の日本の様々なAIR事業の事例をあげ調べた結果、全国のAIRに見られる事業目的として、「地域住民との交流」「国際交流」「地域資源の活用、普及」「地域文化の向上、発掘」「ネットワーク構築」「作家の育成」などがある。その中で工芸を専門とするAIRでは産業や伝統としての工芸文化が根付く地域に外部から作家を呼び、作家の支援のほか、工芸の普及や継承または新たな工芸文化をつくっていくなどの目的がある。

本研究では滋賀県立陶芸の森創作研修館と瀬戸市新世紀工芸館のAIR事業を事例にあげた。それは、滋賀県立陶芸の森創作研修館は様々な試行を経て、今の事業を確立したということから多くの活動経歴が期待できたからである。瀬戸市新世紀工芸館では地域の工芸の振興の活動に作家の参加を義務付けているところから地域との交流について

積極的だと考えられた。この二つの文化施設を中心に調べAIR事業からみる、地域の芸術文化の活性化について考察し、地域と作家がつながる作家支援制度の可能性を探った。

事例から見るAIR

滋賀県立陶芸の森創作研修館のAIR事業は事業開始から20年以上あり、創作研修館は、AIR事業としてだけではなく現在に至るまで地域産業の陶器業界との交流や伝統技術の継承事業など多くの地域の交流活動が引き続き行われていた。近年は滞在作家が地域とのイベントの参加や近隣の学校との交流をしている。取材を行ったところ、制作に集中し純粋に工房として利用している作家が多く、長いキャリアを持っている作家や若手の作家など様々な方が利用しており、意見を交換し、お互い刺激しあっているようだ。また職員の方によるとこれからは作家に信楽の工芸の職人や、窯業の技術者との関わりの中で技術を学ぶ必要性や、作家の中で別世代の交流も必要を感じていることがわかった。

一方、瀬戸市新世紀工芸館の工房は、瀬戸市文化振興財団のAIR事業の滞在作家と工芸館の研修プログラムの研修生が制作拠点を同じくし制作している。AIR事業の作家と研修生が制作の上で刺激しあって有意義な時間を作り出されているようだった。地域交流に関しては瀬戸市は地域の行事が多く、研修生は自分の制作作品を出品などで参加し、地域との関わりを持っている。AIR事業の滞在作家は自身の作品について公開

制作などで発表し地域との交流を図っている。職員の方からは新世紀工芸館として、研修プログラム、レジデンス事業を一体として考えたいとの展望があり、どのように地域にアピールしていくか今後の活動も注目すべき点である。

最後に

取材を通し滞在作家が限られた時間内でイベントなどを通じた地域との交流は難しく、AIR事業の職員の方も試行錯誤していることがわかった。しかし制作以外の移動や食事の時間などで作家個人が食や人などに触れ印象深い体験があれば作家にとっては地域のことを深く知ることにもつながる。そのために積極的にサポートをする地域の人材も必要なのではないかと考えられる。主に二つのAIR事業からそれぞれの環境や考えをふまえて、作家の支援や地域との関わり方など試行錯誤し各々の事業の目標に向かっており、その中で継続していく点や地域との関わり方が浮き彫りになった。今後は地域市民からの視点も調べ、AIR事業を通し文化施設と地域と作家の発展性について考察し続けていきたい。

イスラム世界の子どもたちは 美術教育から何を学ぶか

Writer

箕輪 佳奈恵 MINOWA Kanae

博士後期課程芸術専攻
芸術学領域 1年

契機

2008年から2010年までの2年間、私はイスラムの国であるモルディブ共和国で暮らし、小学校の教師として現地の小学生に図工を教えていた。ある日の授業で、子どもたち同士で「友だちの絵」を描かせようとした時、一人の教師が私にこう忠告してきた。

「私たちはイスラム教徒だから、人の顔を描いてはいけない」

一般的にイスラムの世界では、人間や動物を描くことは好ましくないとされている。その程度の予備知識は当時の私でももっていたが、面と向かって価値観の違いを突きつけられたことに、強く動揺したのを今も鮮明に記憶している。

結局、彼女が周囲の他の教師に確認し、人を描いても問題はないということで一応の決着はついた。しかし、美術教育に携わる立場として、「人を描くことができないのだとしたら一体何を描けばいいのだろうか?」「そもそも人を描く必要性はどこにあるのか?」としばらく悶々と考え続け、終には「この子どもたちが美術教育を通して学ぶべきことは何なのだろうか?」という根本的な問いを抱くようになった。美術教育の価値、その存在そのものに対する問いである。

そしてその問いは今現在にまで至り、私の研究の原動力となっている。

表現における禁忌

人物や動物を表現することへの忌避、というところまで話を戻すが、そもそもなぜイスラム教徒の人々はそのような意識をもつようになったのか。

実はイスラム教の聖典「コーラン」では偶像崇拜を禁止しているものの、人

物・動物表現自体を禁じてはいない。その一方、預言者ムハンマドの言行録「ハディース」においては、生き物の描写を避けることが明示されており、生き物を形作るといふ神の如き振る舞いをする芸術家の存在を非難すらしている。そのためイスラムの世界では、あらゆる宗教的な文脈において生き物を表現することが避けられるようになったといわれる。よって、宗教に無関係な事物に関しては人物や動物の表現も存在しているのだが、それがイスラムの世界における統一された見解ではなく、中には「人を描いてはいけない」と私に忠告してくれた教師のように、宗教に無関係な場であっても人物・動物の表現は許されないと考える人もいるようである。

子どもたちの表現

人物・動物表現に対して多様な解釈の仕方がみられるイスラムの世界だが、それは美術教育の受け手となる子どもたちについても同様である。人物や動物を描いたり形作ったりすることは全く問題ないと考える子どももいれば、学校の課題だから仕方なく取り組むが本当は人や動物の絵を描くことに抵抗を感じる子どももいる、ということが先行の研究からもわかっている。

では、私が関わったモルディブの子どもたちはどうであったかという点、少なくとも私が教えていた子どもたちには、人物や動物の表現に対する嫌悪感のようなものはみられなかった。前述の「友だちの絵」を描く授業では、恥ずかしがる子どももいたが嫌がる素振りを見せることはなく、多くの子

どもが相手の顔をしっかりと観察して描いていた。粘土で動物を作る授業を実施したこともあったが、トカゲや蝶、猫など身近な動物を楽しんで表現していた。

これが、日本人の私による授業だったためなのか、それとも、テレビなどにより日頃から外国の文化が身近にある環境だったためなのか、その確かな要因はまだはっきりとしない。しかしそれを明らかにすることが、イスラムという表現に制約のある世界において、美術教育を通して子どもたちが何を学ぶべきなのかを探る一つのヒントになるかもしれないと考えている。

おわりに

美術教育には多様なかたちがあるので、それぞれに価値あるものとして認められるべきである。人を描かない美術教育があってもいいと思う。ただ、我々とは異なる価値観をもつ人々が、何を美術教育として選択し、どのような思いをもって子どもたちに伝えているのか。それを明らかにすることは、日本の美術教育を考える際にも有益な示唆となるのではないだろうか。



「友だちの絵」授業風景(2009年10月撮影)